

子どもたちが考える森林のあり方

松之山小学校 緑の少年団（新潟県）

“森林は遊び場”を実感する
自主的な活動

豪雪地として知られる新潟県十日町市松之山地区。この土地に、今年で創立一三四年を迎える松之山小学校があります。全校児童数は今年度六一名。毎年初夏になると野鳥ファンにはたまらない鳥、ブッポウソウや、アカシヨウビンが飛来するこの小学校に、一九九七年、緑の少年団が発足しました。それから一〇年、全校児童による森林を使った学習など活動内容は今も変わっていません。「無理をせず、できることを楽しみながら続けてきました。この活動によって、子どもたちが、森林を改めて意識するきっかけになれば、と思っています」

というのは、松之山小学校の校長先生であり、緑の少年団育成会会長でもある、小野塚修一さん。緑豊かなこの土地で、森林を改めて意識することの大切さを強調します。

「一時期、里山で遊ばない子どもが本当に多かったです。毎日林道を通って通学しているのに、森林の中に入って遊んだことがない子どももいたくらい。物心ついたときから、周

りには緑が溢れている環境なので、森林の存在が当たり前過ぎて、遊び場として意識しない子どもたちが多かったように思えます。それになんと言っても、子どもたちのライフスタイルが変化したことが大きいですね。昔とは違って、都会の子どもと同じように、テレビを見たりゲームをしたりして遊ぶようになりましたから。その背景には、農作業を手伝わそうとしない親が多くなり、里山の遊び方を知らない子どもの実態があります。でも、里山は子どもにとって楽しい遊び場なのは、昔も今も変わらないと思うのです。だから、子どもたちには、緑の少年団の活動を通じて、森林は楽しい遊び場なんだ、ということを実感してほしい、森林の存在を改めて意識してほしいですね」

緑の少年団が発足してから、「森林に対して何をしたらよいのかを、子どもたちだけで考えるようになって」とも言います。例えば、学校に隣接する、それまで手入れの行き届いていなかった学校林の手入れを行うようにもなり、地域の方々の協力を得ながら保全管理を行い、学校林を観察や活動の場として学習にも役

立てるようになりました。とくに、六年生になると学校林の一部を自分たちで管理運営するようになり、毎年その年の六年生独自の考え方で森林整備が行われています。落ち枝拾いや階段整備などをして、近くの保育園の園児を招いて一緒に遊べるような環境づくりをしたり、木にロープをかけて遊べるように周辺を整備したり、と活動内容は年々さまざまです。

こうした子どもたちの地道な活動は、全国にも知られ評価されるようになり、二〇〇一年には全国育樹祭で大会会長賞を、二〇〇七年には第一回 みどりの式典 において緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰を受賞しました。

しかし、子どもたちはいたって冷静。これらにおごることなく、相変わらずのマイペースで自分たちの学校林を大切に、周辺の自然、さらには地域全体の自然を大切にすることを続けています。この先、児童が次々と入れ替わっても、活動は変わらず続けられるでしょう。松之山学校がある限り、豊かな自然がある限り、自然を大切にすることは子どもたちに受け継がれていくはずですよ。



上 : 同じ松之山地区にあるブナ林“美人林”での清掃活動
 中左: 隣接する学校林の下草刈りを実施
 中 : 子どもたちが学校林の中につくった足場
 中右: 創立130年を記念してつくられ販売もされている『学びの森ハンドブック』
 下 : 森林の中で行われる植物観察学習

data

〒 942-1406
 新潟県十日町市松之山 1162 3 十日町市立松之山小学校内
 ☎025-596-2014
<http://www.edu.city.tokamachi.niigata.jp/els/matsunoyama/>